

2023 年度 ご挨拶

医科歯科大へ、医科歯科大から

この度の令和 6 年能登半島地震により被災されました多くの方々に心よりお見舞い申し上げます。被災地におられます皆様におかれましては、損害の軽微と 1 日も早い復興をお祈り申し上げます。



(2023 年 3 月、非常勤講師の長嶺敬彦先生の大学院講義後、神田明神で)

ずるずる長引いていたコロナ騒ぎも、2023 年 5 月の 5 類格下げによってようやく落ち着き、この 3 年間ですっかり乱れたリズムを取り返そうとしています。一方で、「しなくても良かったこと」も顕となり、一生懸命無駄なことに時間と労力を割く手間を減らすことができました（完全に止めるのはまだ難しかったです）。そのくせ、この「ご挨拶」も例によって 1 年遅れになるギリギリのところになってしまいました。愛読者(?)の方々には大変申し訳ありませんでした。

「諦めるのじゃない、無理をしないということだ。」(辻仁成「自分流」)

という言葉が非常に印象に残った3年間でした。そんな中で、昨今の大学は「見つけるより、解くことに偏りすぎ」という卓見を目にし、まさにそうだと首肯するばかりでした。いろいろ世知辛いことばかりですが、解答が簡単に見つからない問題を大学では解かせるのだ、という矜持は保ちたいと思いました。そんな時、高村光太郎の詩を見つけ、歯科心身医学のあるべき姿を見失わないようにしたいと思い返しました。

さういふ言葉で言へないものがあるのだ
さういふ考方に乗らないものがあるのだ

さういふ色で出せないものがあるのだ
さういふ見方で描けないものがあるのだ

さういふ道とはまるで違った道があるのだ
さういふ図形にはまるで嵌らない図形があるのだ

さういふものがこの空間に充満するのだ
さういふものが微塵の中にも激動するのだ

さういふものだけがいやでも己を動かすのだ
さういふものだけがこの水引草に紅い点々をうつのだ

(詩：高村光太郎 「激動するもの」)

ところで2023年度は、17年目の医科歯科大学(TMDU)生活でした。個人的には今年で丁度、歯科医師人生の半分を本学で過ごしたことになります。

日本の歯科界を牽引してきた本学も「変わる事と変わってはいけないこと」の間で大きく揺れ動いているように見えます。どうせお流れになるだろうと高を括っていた東工大との合併も、2023年11月にはとうとう「国立大学法人法の一部を改正する法律」が国会を通過してしまいました。文科省が公表している、「第三条 国立大学法人東京医科歯科大学(以下「東京医科歯科大学法人」という。)は、この法律の施行の時に**解散**するものとし」という文言に少なからずショックを受けてしまいました。お上にも色々な事情があったのですが、当事者にとって「統廃合」というのはあまり気持ちの良いものではありません。「恒産なくして恒心なし」、ということでしょうか。今後の本学・歯学部の成り行きと自分達がなすべきことをどう整合していくか、色々考えることがますます多くなりそうです。

元々は本稿で歯科医師人生後半の「医科歯科大から」を述べるつもりでしたが、それはまたこの事態がもう少し自分でも咀嚼できてからにしておきたいと思います。

以上のような経緯はともかく、コロナ明けの良かったこととしては、久々の海外遠征に加え、色々な人たちと久闊を叙することができたことです。



(本学の国際サマープログラムの Lab Visit で海外からの留学生と)



(3年ぶりの韓国歯科心身医学会に参加)



(インドネシア歯科医学会。韓国チームとコラボで歯科心身医学のシンポジウム。)

そんな中、敬愛してやまない同門の先輩に久しぶりにお会いした際、「福大の時、どうやって勉強したの？」とポロッと訊かれました。僕なんかより遥かに優秀な先生でしたので、「行く先が案じられたのも無理はない」(夏目漱石「坊ちゃん」)を地で行っていた30年前の僕が、あの環境(野戦病院のような地方の私立医科大の歯科部門)で歯科心身医学の臨床や研究(論文作成)を誰にどのように習ったのか、不思議でしょうがなかったそうです。

結論から言えば、僕は患者さんに恵まれてきました。色々な患者さんから多くのことを学んできました。その上、未熟な取り組みや無謀な試みを温かくサポートして下さる学内外の緒先輩方に恵まれてきました。学会でお会いするたびに「苦労したことは論文に残さなきゃダメだよ」と諭して下さる東京の大先輩(何を隠そう、元国立精神・神経センター武蔵病院 歯科の中村広一先生です)や同科では誰も採択されていなかった科研費に挑戦するように励ましていただいた医局の先輩(福大歯科口腔外科同門会会長の武井俊哉先生)など。みんながお師匠でした。

ただし好きにやらせてもらった代わりに、方法論も自分で見つけていけないといけない。治療も研究も。学会発表や論文の書き方も。幸い立派な図書館が医局の階下であり、文献を渉猟しまくりました。他領域のさまざまな学会や研究会にも参加しました。もちろん生の患者さん相手ですから、行き当たりばったりの突撃玉砕ではなく、手術同様しっかりと準備とシミュレーションを繰り返す必要があります。治療に行き詰まった時は、九大1内科の諸先輩方や同大心療内科の安田弘之先生に教えを乞いに伺いました。その治療結果は自分の責任。次も、その次も考えて今の決断なのです。聞き齧りの情報や言葉に流されずに自分の頭

でしっかり考え、情報の取捨選択と決断を繰り返すことで考える力を養うことには非常に良い環境であったのかもしれない。

また先ほどの「恒産なくして恒心なし」。34年前の当時福岡大学病院長であられた菊池昌弘教授（病理学。組織球性壊死性リンパ節炎「菊池病」の発見でご高名）から「これからの大学教授は経営もできなければならない」との持論をお聞きし、超ドビびっくりしたのですが、今となってはまさに慧眼というしかありません。こういった勉強も後々教授になってから本当に役立ちました。

思い起こせば 34 年間の歯科医師人生で、たくさんの経験、良いことも悪いこともしてきました。昔、ご無礼してしまった諸先輩方や同僚の皆さまには、本当に申し訳ない思いでいっぱいです。特に前半の 17 年間は福岡での修行時代とも言え、自分一人ではどうしようもなかったことばかりだったと気付かされます。また若い時には、「こんなこと無駄だ」と嫌がっていたことが、後でその重要さに気づくことがあるものです。臨床統計など嫌で嫌で仕方なく、頑固に「やらない」などとゴネては、ずいぶん上司（特に助教授、講師、助手の先生方）や同期を困らせていたものでした（結局医局の全員でした泣）。ずっと周りに恵まれて生きて、生かされてきたものだと思いつく今日この頃です。



良くも悪くもマイナー路線一直線で、日の当たる分野で迷いもなく前進していた（ように見えた）同級生が眩しく見えたものでした。プライドは大事ですが、それに縛られると一気に崩れてしまうものです。気概、自負といった心性と実践に裏付けられた自信とのバランスが重要と常々考えてきました。人に言われるのではなく、いかに自分自身で変われるか？現状で満足せず、自らの能力を信じ、もっともっと上があると思いつける心の強さを持つことの大事さを学んできたように思います。

思えば一切妥協をしない恩師に師事していました。学会抄録一つでもなかなか OK が出ず、学会場まで延々と一字一句の推敲を求められました。手書きでなくて幸いだったので、ようやくワープロが普及したかという時代でした。

今、指導する立場で若い先生たちの論文原稿を見て、そこまで詰めているのか？詰めなくて良いのか？と自問自答を繰り返しています。苦勞したからこそ、うまく行った時の達成感には大きいものがあるのですが、昨今の風潮は、その達成感や自信の醸成を阻む方向に流れている気がします。

摂食障害の「行動制限療法」を生み出された深町建先生は、ご自身を「職人」と表現されていました。地道な治療を丁寧にやり続けることで、質が高まる。反復していくことで感性が磨かれ、頭も心も成長していく。やり続ける事が大切、と教わってきた様に思います。そして今、自分ではできていると安住するのではなく、もっと良くするための他の方法がないか？と考え続けること、だと。データというものはあくまでも過去の結果、頼りすぎると目の前の患者さんの今を見失ってしまう、患者さんが取り残されてしまうものです。データやエビデンスが安易な説明装置と化し、それらを盾に患者さんを拒絶したり、救える可能性からの逃げ口上になったりしては何もならないと思います。

2023年度春から東京歯科大学で福田謙一教授が主宰される 口腔健康科学講座 障害者歯科・口腔顔面痛研究室との定期合同勉強会も開始しました。私学の雄と交流することで、歯科心身医療で何を引き受け、どのように象っていくべきなのか、自分たちがしていることがどうなのかを見直す大変良い機会になりました。来年度も継続します。



(東京歯科大 福田教室との勉強会)

「歯科界は迷走している。」

「どうすればこの精神的貧しさから脱出できるのか、誰かが考えねばならないが、かつてこの問いに向き合ったはずの多くの学問が、今ことごとく目を逸らしている。」

「歯科心身医学の出番だとは思わんかね。」

(夏川草介「始まりの木」のバクリ。すみません汗)

(2024年3月11日 文責；豊福)